

ゲルマニアも、パンノニア（ドナウ川の南西部）も、ダルマティア（ユーゴスラヴィアの西部海岸地方）も、イリュリウム（マケドニアとイタリアの境界地帯）も、そして他の国も残らずわが版図なのです。ローマの威信のあるところ、ローマの言葉が支配するのです……。

ところで、学識豊かな人物のいなかった過去の時代は悲劇であったが、その悲しみに負けじとわれわれは当代を祝福せねばなりません。というのも、少しく努力すれば、あらゆる学問の糧であるローマの言語の刷新が都市のそれよりも素早いと確信できるからです。それだからこそ、祖国、人類、偉大なる自然へのわたしの愛にかけて、わたしは高みから、言語を研究する者たちに、常のごとく凱歌を挙げるよう勧告したいと思うのです。つまりこういうことなのです。古代ローマの市民たちよ、帝国という家ではなく文芸の母たるあなた方の都市がガリアに侵略されるのを、いつまで許しておくのか。いつまでラテン語が蛮人に圧せられるのを許しておくのか。無関心のまま不敬な眠差しで、いつまで冒瀆されるのを眺めているつもりか。ローマの町の礎の道の残骸がなくなるまでか。あなたの方の中には歴史家がいて、それはウエイイ（現在名ヴェイオ。ローマの北十二マイル。エトルリアの町。カミルスに攻略された）に住まうことを意味しています。またギリシア語からの翻訳を生業をしている人もいて、これはアルデア（ローマの南方二十四マイルにあるローマ人の町）に住むことです。また演説の原稿を書く人もいれば一篇の詩をものす人もいるであろうが、これはカンピドリオの血と城塞とを守ることなのです。大いなる称讃に値する企てであって、敵を駆逐するよりも祖国を解放しているのです。われわれはカミルスの轍を踏まねばなりません。なぜならウエルギリウスも言うように、カミルスが祖国に勝利の旗印と刷新とをもたらしたからなのです。

（傍点——訳者澤井）

引用文すべてに傍点を打ちたい気持ちのするほど熱のこもった訴えであることが読み取れるとともに、狭義の文法書には納まりきれない書物であることも明らかになったと思う。

ヴァッラは古代ローマ帝国の威信の復興に仮託した純正なるラテン語（古代ローマ人の話し書いたラテン語）の再興を基調音として響かせながら、人文主義的刷新の普遍的価値を表現したのではあるまいか。つまり古典古代の文化を蘇生させることである。多くの遺産がラテン語やラテン的知とともに再生され、帝国の崩壊などといったさまざまな政治的変遷を経て、いまはじめて精神の真の刷新が神の国において開始されるのである。刷新という立て役者の中に息づいたこうした意識の意義は大きいと思われる。

ヴァッラは（外国語である）ラテン語つまり（ラテン）文法をそっくりそのまま蘇生させるうえで、その分なおさら古代を批判的に見つめようとしたと考えられる。それは古代、つまり文法が批判性を付与できる存在であり、かつまたそうした自覚の上に立って集められた神話であったとも推察される。純正なる文法（ラテン語）はヴァッラにとって、絶対的な完全性の中にあり、過去にあってひとつの円環を形成していた。

始源へ回帰することは物の本質に触れることであり、価値を認定することでもある。そしてそこに誤謬を見出した場合には批判を通して自覚的な再発見を行わなければならないが、それが可能なのは始源への回帰が模倣に終わらず進歩と歩調を合わせているときに限られよう。ヴァッラは批判を内包した一種の産婆術で新しいダイナミックな方向性を見出していったと考えられる。そのエネルギーの根底に言語（ラテン語つまり文法）への深い認識が潜んでいたのではあるまいか。

正しい文法の体得はヴァッラにとって、古代復興の起爆剤となっており、それを通して始源への回帰は可能となった。諸学問の根源としての文法はルネサンス期に至ってその位置を古典古代の復興の中に見出し、もろもろの豊かな学知を生み出す種子となったのである。

三活の二極化

ルネサンス思想・哲学研究の泰斗であるP・O・クリステラーは、人文主義のルネサンス文化への、わけでも哲学面での影響を次の四点にまとめている。¹¹⁰

(1) 人間、および人間の尊厳、宇宙における人間の特権的地位が強調されたことで、代表的人物としてはバトラルカやマネッティがいる。

(2) 個人の感情、意見、経験、および環境の具体的特異性を表現したり、そうしたものが表現に値するのみなした。具体的には肖像画、伝記(自伝)、叙事文学がある。

(3) 文体や文芸形式の典雅さ、適切さ、および明晰さを尊び嗜好する傾向が強まったことで、ルネサンス期の科学者や哲学者の文体に見られる。

(4) 古代学問への復興の誘因となるのだが、特定の古代思想家や学派の哲学学説を復興したり、表現せんとする努力が繰り返された。いわば人文主義者のお気に入りへのスローガンである。

以上の四点はそれぞれ、ルネサンス文化の特徴を言い当てていて首肯せざるをえない。とりわけ(2)の個人を中心とした表現の問題は、ブルクハルトによって巧妙に、「個人主義」の名をもってまとめ上げられている。

肖像画、伝記(自伝)などは自分を見つめる作業であり、そこには自己を形成している背景となっている、当の人物の生まれ育った環境や生活の営みがおのずと反映されてくるはずである。肖像画や伝記にその人物の人格や生活の実態が透けて見えるわけである。

ブルクハルトはこれを、「イタリア人だけは多彩きわまる外面生活と並べて、自身の内面を感動的に描写する」と述べている。

外面のみならず内面も、この場合、すべて生活の実質から浮き出てくるものであり、イタリア人は他のヨーロッパ人よりも、営みとしての生活を、外からも内からもじっくりと眺めたことを示唆していると思われる。

「生活」とは定義しにくい言葉だが、いまここでは「人が生きていくその生き方の総体」との定義を与えてみたいと思う。

ところで、ルネサンス期で「生活」を考える場合、ふつう次のような二極で捉えられることが多い。つまり、行動的生活と瞑想的生活の二つである。

行動的生活は、十四世紀中頃から十五世紀初頭にかけてのフィレンツェ人文主義の英雄時代に、コルッチョ・サルターティ、レオナルド・ブルーニに代表される、共和政ローマの讚美、フィレンツェの自由の高吟、古典研究への情熱、市民生活への情熱を基調とする、市民的人文主義の時代の活動的(政治的)な市民生活を指す。

この時期は対外的にはミラノからの脅威があつて、フィレンツェ市民は愛国心に燃えたことが、政治行動を重視する市民的人文主義を高めた一因であるとも言えよう。

上昇気運にある意気軒昂な市民階級に支えられた思潮であり、社会への参加の文化であり、人間と世界の発見者たる自己実現的人間像を確立せんとした——この自己実現、自己形成という観点からも、伝記、自伝が盛んになったことが理解できよう。

代表的人物であるフィレンツェ書記官長コルッチョ・サルターティの生活理念の一端を示しておこう。

彼は行動を思索よりも優位にあると考え、意志を能動とし、知性を受動として捉え、行動的な知を瞑想的な知より高く評価している。このような知は日常生活の重視を導き、家族、親戚、友人を尊重する倫理的関心を生み出した。営みとしての生活、それに伴う人間関係に視線を多大に注ぎ、理念的には知を倫理、政治、経済の三つを含むものとみなして、生活と知が積極的に呼応するものと考えた。

一四三四年、コジモ・デ・メディチ(大コジモ)がフィレンツェを実質的に支配して、メディチ家の偽装君主家が成立すると、前代に実質的に市政を担当していた書記官長の任務が、法令や通達などの文書を優雅なラテ

ン語に移すだけとなって、人文主義がその実質的活力を奪われてしまう。

思想的にはフィチーノの新プラトン主義が興って文人的人文主義が花開き、また大ロレンツォの宮廷文化もあって、生活は行動的（政治的）なものから瞑想的（消極的、非政治的）なものへと移行していく。

それは人知における神的積極面の強調であり、神的啓示の意義を高唱するものである。中世的な知の繰り返しと等しく、新プラトン主義的な意味での純粹なる瞑想である。

瞑想的な生活はしたがって、政治的行動の面での無力化、人文主義者の書記化・教師化を招き、また生活の空虚化をもたらした。

かくて時代の推移は考慮に入れるにしても、生活の二極化が生み出されてくるわけである。

融合

この行動と瞑想の二極化を融合した人物として人文主義者マッテオ・パルミエーリが挙げられる。

一四〇六年に生まれて七五年に死去した彼は、十五世紀のフィレンツェをほぼ生きた人物ということになる。彼の死に際して、次のような弔辞がアルマンニ・リヌッチーニより贈られた。

マッテオ・パルミエーリは、全生涯を通じて自由七科の研究に精力を傾けながら、自分に称讃を、栄光ある祖国に優位をもたらさしめる種類の生活を選びました。哲学者の教えるところによりますと、幸福には二種類あるが、同様に生活にも二つの類型があります。そのうちの一つは市民生活的活動の中で展開されます。もう一方は諸活動から離れて、現実についての究極の認識に到達することがあまねく意図されています。パルミエーリはなべて賢明にも、二つのうちの間において中間の道を選び、フィレンツェ市民の間に幸運と徳性への大きな希望を時をおかずに生じさせました。

（傍点………訳者澤井）

生活の二つの類型とは行動的生活と瞑想的な生活であり、パルミエーリが選んだとされる「中間の道」とは、どっちつかずの道ではなくて、両者が融合した道の意味だと考えられる。

彼は青年期と壮年期に、それぞれ俗語による作品を発表している。

青年期のものは対話篇『市民生活論』(Della vita civile)であり、壮年期のものは哲学的長詩『生命の国』(Citta di vita)である。

栗種問屋の家に生まれたパルミエーリは若くして父を失い、家計維持の任を負う。引用文中にもあったように、自由七科を勉強して教養人としての自己形成を行なう。青年期は市民的人文主義者の時代に相当し、二十代中頃に書かれた『市民生活論』(一四三〇—三二年)もその影響下において、行動的生活を基調としている。

壮年期は文人的人文主義に該当しており、フィチーノなどによる新プラトン主義の影響を強く受け、その感化で書かれた『生命の国』は宗教的・神学的関心が濃くて瞑想的である。

さて、ここで考えてみたいのは、パルミエーリが行動と瞑想の中間の道を、両者を融合するかたちで生きたとするならば、その契機となったものは何かということである。それを『市民生活論』の中に見出せないであろうか。

発見のための第一歩として、『市民生活論』の概要を見ておこう。

著作の中心テーマは「良き市民」(ottimo cittadino)の育成で、全体としては「良き市民」の形成を論じた教育論と、「良き市民」としての生き方を論じた社会道徳論の部分から成る。社会道徳とは、もっと平坦な言葉で言えば、より良い社会生活を営むための規範のことだと考えられる。理念ばかりでなく生き方という実面、有用性をも含めた著作なのである。

著作は四巻に分かたれる。

第一巻 —— 児童の年齢に応じた教育、人間形成の問題と「市民」の正しい生き方の問題。

第二巻 —— △方正▽ (onestata) の諸徳のうち、思慮、剛毅、節制を論ず。

第三巻 —— △方正▽ の諸徳のうち、正義 (公正) を論ず。

第四巻 —— △有用性▽ (utilita) を論ず。

パルミエーリにとって現世における最良の生活とは、「良き国家社会」の中で「良き市民」として生きること
で、そのためには四種類の固有の徳性があると言う。

- (1) —— 市民的徳性。
- (2) —— 浄罪的徳性。
- (3) —— 「すでに浄化された魂」に固有の徳性。
- (4) —— 「神の精神」のうちに見出せる完全な徳性。

これら四つのうち、第二の徳性は、「神的なもの」の探究者たちに固有の徳性であり、この人たちは、あらゆる肉体的穢れから自分を浄め、地上的なものを軽蔑し、ただ天上的なものの瞑想にのみ意を用いようとしてい^らる。

……この第二の徳性によって人びとは、神的なものの幸福の真の認識者となりますが、これらの徳性は、あらゆる公共の活動家から退いて独立のうちに生きる閑暇の人びとに見られる徳性であり、この人たちは、ただ自分自身の救いへののみ意を用い、他の人びととの共同生活にはなんら役立ちません。この人たちについて聖書に記されています。単なる聖性はただ自分ひとりに役立つにすぎません。……そこで、いっそうよくおわかりでしょうが、孤独な生活は市民生活の下位にあり……

したがって、この地上でなされることのうち最も神の御心に適い^よ嘉されるのは、多くの人びとが正義を絆として一つに結ばれあって生きる国家社会を正しく統べ治めることにほかなりません。ですから、都市の正しい統治者や祖国の護持者たちに対して、神は天上に一定の場所を約束しておられるのであって、彼らはそこで聖者たちとともに永遠に祝福されて生きるのです^{こと}。

以上のように、浄罪的徳性の性質を定義づけながらも、それによる孤独な生活を批判して、共同生活の優位を彼は説いている。つまり、瞑想的な生活よりも行動的 (政治的) な市民生活の方が上位を占めることが、神意の下で確定されている。

これは理想的人間を「良き市民」とし、理想的生活を「市民生活」としたパルミエーリならではの理念であるのは言うまでもない。

だが、行動的生活と瞑想的な生活の融合の契機という観点から見た場合、最も注目には値するのは、第四巻で論じられる△有用性▽だと思われるが、いかなるものであろうか。

実質的な「市民生活」を称揚する結果、それを支える人間活動が積極的に評価される。これは飲む、食う、作るなどの生活の原質的な営みを指す部分であり、たとえ瞑想的生活を偏重するものでも、生きるために回避できない営みなのである。

有用性

有用性は数も多くてさまざまです。しかしなかでも、人間によって人間に与えられたものほど優れたものはありません。

このように述べてパルミエーリは、人間生活を豊かにする技術や産業として、耕作、果実栽培を挙げる。この場合の人間生活とは、行動的生活や瞑想的生活の両者に共通する、生きていくための実質的生活を指している。そして注目すべきことは、「人間によって人間に与えられる」であって、「神によって」ではないことである。人間中心の思想が窺える。

さらに医療、航海、冶金、木材加工、石掘、建築、飼育が挙げられており、「これらがなければ人間の生活は漂泊の状態となり、粗野で教養のない獣と同類」になるとし、「産業によって人間生活は飾りを得て磨かれます。都市を造り、法律を作り、市民生活を営むわけです」。「人間は、有用性と他の人間の援助によって育まれてきました」と結論づけている。

第四巻は、他の三巻が理念的であるのに対して、生活の中に偏在する有用性の価値を説いていて性格を異にするが、この場合の有用性は、いま略述してきてわかるように、主に「技術」(手仕事)を指している。パルミエーリが手仕事や労働の意義をきちんと認識していることが理解されよう。

「有用性」とは中世では政治用語であり、技術とか労働の意味では用いられていなかったが、ある時期に産業上・経済上の術語に変化したと考えられる。

パルミエーリより一世代若いナポリの人文主義者ジョヴァンニ・ポントーノは、『堅忍論』で次のように述べている。少し長い引用になるが、なかなか意義深い文章なので諒とされた。

私たちは労働を批判すべきではない。仕事をするために生まれて以来、働かずしては徳性にも幸福にも到達することはできないのである。技術と理論の間のいかなるものも、複雑さに欠けるにしても、労働なしでは入手できないし、たえまない修練がないと、長期にわたって保ちえない。仕事の鍛練は実際、知と技を仕分けることが難しいことを習慣的に教えてくれ、そうした習慣を我がものとするのは全く最高に難しい。そこではなによりも、本性自体がなんらかの方法で反発したり反抗したりするからである。ケケロはある著作の中で、労働を精神あるいは肉体の作用、もしくははきわめて過重な課役と定義している。それゆえ、いつもたゆまず仕事をしして習慣を身につけても、達成には必ず困難が伴うのである。本性に抵抗することが無情で苛酷なものである。一方で私たちは労働の実りを完璧なる作品と呼んでいる。人間の幸福に到達する手段としての徳性は、精神同様、肉体の耐え難い使役や労働なくば獲得できないわけである。労働が侮るべきものではないのみならず、総じて有用で必要なものであることを誰が疑いようか。

考える事柄もなく、一歩も動く必要のないほど、肉体的にも精神的にも無為徒食の者がいるならば、そうした人間以上に惨めな者がどこにしようか。人間と呼ぶのにも値しないのではないか。もちろんこの点私たちは声を大にして、大変な危険を冒して勇敢に栄光と勝利を手にした人たちを、幸運の手助けを得たり怠惰な敵のために勝利を得た人たちよりも称讃する。状況や運命のいかんで会得したものではなくて、自分で刻苦して手に入れるものは値が高い。それは有用性と労働の必然を示しており、それがなければ徳性は得られず、またにもかかわらず、徳性がすべて歓迎されるべき悦ばしいものであることが明らかとなり、目的が達成されると純粋な享楽に浸れるのである。

(傍点—— 訳者澤井)

仕事や労働への讃歌とみなしてもよい文章である。神ならぬ人間の手によって造られた、人間の領域という新しい意識が表現されている。

このような文章が際立つのは、その背景に手仕事(技術)に関する軽視が潜んでいるからだと考えられる。「有用性と労働」の必然の結果として「徳性」が得られるという考えは、単に観想的な知的生活を行なっているだけでは真の徳性は身につけられないことを物語っている。

パオロ・ロッシは、『哲学者と機械』において十六世紀という時代を次のように説明している。

この時代には、ヨーロッパ文化のもっとも進歩的な代表者すべてにおいて、文学もしくは修辭学を重視する教育の代わりに、技術的訓練や職業的養成を重視するような型に取って代えようとする傾向が存在した。¹⁾

机上の学問から手による技の方への移行である。つまり職人や技術者の仕事のありように文化的意義のあることが改めて確認されたわけで、いわゆる教養人は有用性をもたらす根本たる技術の実践面に対する昔ながらの輕視を棄てて、実用性を主軸とした技芸に注目していくことになる。

換言すれば、経験の重視、現実の觀察、実践への着目が芽生えてきたことになるうか。やがてこの彼方に科学技術の光輪の一端が見えてくるのではないかと推察される。

接点

これまでパルミエーリの『市民生活論』を基調にして、その中から有用性Vの概念を引き出して行動的生活と瞑想的生活に含まれる、営みとしての生活という共通部分を考え、さらに二つの生活を結びつける契機となつた有用性の意義を、理念と実践の結合との観点から考えてもみた。

ところで、行動的生活や瞑想的生活を送つたのは、人文主義者Vであり、技術を担つたのは職人Vである。この二つのタイプは対立の關係にあつたが、その対置は「ある特定の人々に対しては、またフィレンツェという環境に対しては意味がない」とロッシは述べている。

ダ・ヴィンチにおいて両者が結合しているからだと言う。それは職人を市民階級へ移行させることによって、彼らに社会的地位を与え、「社会的に上位の、宮廷や君主への奉仕Vに直結している文化の中に吸収」してしまつたからだ、とロッシは論を進めている。

確かにそうかもしれない。しかしここには技術や実験や觀察を有用とみなす有用性尊重の意識が根深く介在しているように思われる。

有用性を価値ありとする思潮が先か、有用性がおのずと力を得てその存在意義を認めさせたのが先かは定かではない。

けれども有用性（技術—手仕事）自体は古代や中世から連続と続いているのであり、それがルネサンス期において意識的に採り上げられたことは間違ひなく、その意味ではまさにルネサンスにおいて有用性の位置は新展開を見せたと思われる。すなわち有用性に経済的効用の意味が新たに加わつたのである。

仮に理念と実践のうち、理念面を科学として実践面を生活とした場合、この両者を繋ぐのは技術である。科学者の持つ科学の知の中の有用な面と生活の中の有用性が、それぞれ手を伸ばして握手する図を想い描いてほしい。有用性を契機として両者は結合しており、それは行動的生活と瞑想的生活の接点と同じ有用性なのである。

ルネサンス期においては営みとしての生活にまできちんと目は向けられていて、生活世界の意識的構築が「人達によって人間に与えられ」るもの（パルミエーリ）を軸としてなされていくのである。

6 ム徳性Vの驛り

徳と力量

第一章でも取り上げた十三世紀末に編まれたトスカーナ語による初めての説話集『ノヴェッリーノ』の第六十八話は、「ある若者がアリストレスに尋ねた質問」と題されていて、以下のような内容となっている。

偉大な哲学者であるアリストテレスの許に、ある日、ただならぬ悩みを抱いた青年がやって来る。